

# ウインドランナー～走 る理由～

夜未

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので  
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を  
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

LINEアプリのウインドランナー、ステラちゃんのお話。

注：作者の勝手な妄想です。

見上げた夜空は

目

次



# 見上げた夜空は

辛い。

もう何度そう思つただろうか。

それでもステラはあがる息を抑え、ただ走るという、半ば作業と化した行為を続ける。思えば、いつからだろうか。

ふと、ステラは自分の過去へ意識を飛ばした。

☆ ☆ ☆

自分の生まれは不思議な一族だつたと思う。

一族の全員がフードをつけた夜色のロープを羽織り、ただ、【星】を追い求め続ける探求者だつた。

誰もが【星】について調べ、誰もが危険を省みずに【星】へと手を伸ばす。

それは一種の狂氣とすら呼べるものだつた。

何が彼らを驅り立ててているのか分からぬ。

ただ、どうしようもなく、【星】に焦がれているのだ。

当然、その一族の者を父と母に持つステラも【星】というものに焦がれていた。  
しかし、そのせいで親からの愛をまともに受けられなかつたことを少し寂しいとも感じていた。

ステラは一族として一般的な少女として育ち、彼女もまた幼くして【星】を追い求め続ける探求者となつた。

ただただ、「星」を求め続ける毎日が過ぎ、少しづつ近づいていいるという達成感を一族ぐるみで感じていた。

そして、起こつたことは全て突然のことだつた。

一族総出で探索した大きな遺跡。

ステラが少し息抜きに夜空を見ようと一人抜け出たその時に、遺跡が崩壊を起こした。

おそらく、侵入者対策の罠がまだ生きていたのだろう。

中で調査を続いているステラを除いた一族全員が巻き込まれた。

文字通り一瞬で全てが消え失せた。

地面に千切りとつたような跡を残し、遺跡は丸ごと消失したのだ。

その日、ステラは全てを失つた。

父も母も弟も幼馴染も親友も友人も、自分を支えてくれていた仲間を全て失つたのだ。

残つたのはただただ【星】というものを求め続ける狂氣じみた想いのみ。

そして、その想いは自分への遺言に思えた。

自身の一族の悲願である【星】に手を伸ばし、何年も経つた。

ある日に調べていた遺跡でたまたま一緒にいたトレジャーハンターが緑色のクリスタルを見つけた。

ステラはそれを見た瞬間に【星】への手がかりであると直感した。

迷わずそのクリスタルに手を伸ばし、見つけ出したトレジャーハンターと口論となつた。

そうしているうちに、一匹の妙な鳥がクリスタルを持つて飛んでいった。

ようやくその願いに手が届きそうだというのに、後一步のところで邪魔される。

ステラは迷わずその後を追い、発見者であるトレジャーハンターもそれに続いた。だが、結局その鳥に追いつくことはできなかつた。

何故か道を阻んでくる魔物。

前方から飛んでくるメテオ。

魔分を悪質なまでに含んだ雲。

その他様々なものに邪魔をされ、進むことができなくなつたのだ。

しかし、それと同時にあのクリスタルが【星】に関するものだという確信が持てた。進む道程で【星の虚栄】を見ることができるのだ。

どうやら【星の虚栄】はあの鳥が行つたルートを示しており、その【星の虚栄】をなぞることによつて危険を回避できた。

そうして、ステラのクリスタルを求めて走り続ける日々が始まつたのだ。

☆ ☆ ☆

今、思えばクリスタルを求める者も増えたものだ。

ステラは思った。

初めのうちはステラとあのトレジャー・ハンターしかいなかつたが、そのうちに奇跡の少年と呼ばれている者が増え、最近では冥府の女王、かのダーク・プリンセスまでもがあの鳥とクリスタルを追つていると聞く。

はたしてあのクリスタルにそれほどの価値があるのだろうか。  
ステラ自身には「星」という明確な目的が存在するが、彼らが何故必死でクリスタルを求めているのかわからない。

ただステラにしてみれば強力な競争相手が増えただけだ。

溜め息をつきくなつた。

しかし、そろそろ5キロを超えて走つてゐる。

障害物を躊しながらの全力疾走は疲れるため、そんな余裕はステラにはない。

ステラは目の前の魔分を含んだ雲を避けて、崖を飛び越え、飛来してくるメテオを搔い潜つた。

とつくに日は暮れていふ。

一体いつまでこのようない日々が続くのだろう。

走り続けることは辛く、障害物に当たればかなり危険なことになる。  
常人ならとつくの昔に諦めているだろう。

それでもステラはある鳥を追い続けなければならない。

【星】のため、一族のため。

そして、自分のために。

ステラは夜空に輝く星々を見る。

## 6 見上げた夜空は

いつか、あれに手が届く、その日を目指して。  
決意を糧に、ステラはただ風を切つて走り続けた。